

第68回 男鹿駅伝競走大会イベントレポート (第1回:1区)



男鹿総合案内所のナマハケ立像 (写真提供:男鹿なび)

一昨年に優勝し、昨年は不参加だった男鹿駅伝。チームは再び男鹿の地に戻ってきた。男鹿半島は前日の雨は上がり、曇天で肌寒いくらいの気候だが、このレースの醍醐味は本来、「暑い中で起伏の激しい過酷なコースをタスキでつなぐこと」にあるので、選手達にとっては暑さが無い分、また、雨が降っていない分だけ気持ちに余裕を持って走れそうだ。

二年前のレポートのおさらいになるが、ここで少し男鹿駅伝の歴史に触れてみると、この大会は故高松宮殿下が男鹿半島の戸賀湾を望む高台を「八望台」と命名したことを記念し、昭和27年に一般4チームで競い合われたのが始まりで、その後、歴史を積み重ねて今年で68回目、男鹿国定公園に夏を告げる風物詩として年々盛大に開催されている。

今大会のトピックとしては、コース変更があり、これまで男鹿温泉郷をスタートし入道崎ゴールで長年行われていたコースが、これまでの2区後半付近にある男鹿総合運動公園を発着点とし、半島をぐるっと一周するコースとなった。これにより若干総距離が延びたこともあるが、前後半2区間ずつの距離が10km前後となったため、この4区間にバランスよく力のある選手を配置することが勝敗のカギとなり、区割りは変わったがコース、距離の変わらない3~5区も含め、更に選手層の厚さが求められるコースになったと言えるだろう。

ShinDengen /

【第1区】

今年的一般の部には41チームが出場、男鹿総合運動公園より今年のレースが始まった。

ここで新たな第1区の特徴であるが、公園誘導路を右折してすぐに緩やかな坂を越え男鹿市役所付近の市街地を抜けて1km市街地を直進、右折して一山超えると一転、目の前には広大な海の景色が広がる。昨年までの区間では2区後半～3区中盤までを走ることになる。

伴走車の伴走は1区後半からとなるため、中間地点に簡易的な給水所が設けられている。



1区：13.5km（男鹿総合運動公園～椿漁港）



スタート地点の男鹿総合運動公園：男鹿市総合体育館（写真提供：男鹿なび）



いよいよ新コースで今年のレースが始まった

今年 1 区を任された親崎は埼玉県出身の入社 2 年目。電装事業本部管理部生産管理課に所属し、主に客先からの受注情報を電子データとして受け取り、一元管理された受注情報を生産工場に展開するシステムを用いて損益管理を行う業務を担当している職場でも期待の若手だ。

入社から順調な競技生活を送り、今年も春先の東日本実業団選手権 5000m で自己新をマークするなど、レースを外さない有望な若手が早々にチームのエースに成長を遂げた。

監督の前田も、レースの重要なカギを握る 1 区に自信をもって親崎を起用した。

今年のレポートは、この後、走った選手の直筆感想からレースのリアルな実況をお届けする！！

<< 親崎選手レポート >>

ここまで故障なく練習が継続出来ていたのが、5 月中旬の東日本実業団選手権や 6 月初めの日体大記録会では共に 10000m と 5000m の 2 種目に積極的に出場してきた。

その試合で結果を残すために走るのはもちろんであるが、試合でしか味わえないレース感を養う沢山の経験を積めたことが自分の糧となっている。

また、男鹿駅伝前の 6 月中旬には、会社のご理解ご協力を得て東日本実業団強化合宿に参加させて頂き、普段は共に過ごすことがない他チームの選手らと練習を実施することで、沢山の刺激を貰いながら自分の能力向上を図ることが出来た。

今大会では、それらが多少なりとも報われたのではないかと考えている。

今大会では1区を任されていたので、レースのスタート時間が8:45と早かった。
そのためスタート時間を考慮し、当日の起床時間は夜も明けぬ2:30であった・・・。
起床してからは、身体がレースで万全な状態で走れるように軽く走り、十分、消化が間に合う時間帯に朝食を摂った。

それから前泊していた宿舎を出発し、スタート地点付近の控室に到着してからはレースのウォーミングアップ開始の時間まで、音楽を聴きながらストレッチをしてリラックスするように心掛けた。

そこに、本大会の応援のために遠路より駆けつけて頂いた鈴木社長、堀口工場長をはじめとする大勢の方々に激励の言葉をかけて頂き、レース本番では、それを力の源とすることが出来た。

レースのウォーミングアップを終えユニフォームに着替え、シューズを履き替えてレース開始5分前、スタート地点に整列した時、1区で絶対に区間賞を獲てやるという気持ちが沸々と沸いてきた。

ピストルの号砲でレースがスタートし、一般の部、大学の部が同じコースを走るためスタート時は大集団での走り出しとなった。



レース序盤に余裕のある表情で走る親崎

13.5kmある1区のコースだが、スタート直後300m付近で大きな起伏があり、私は先頭集団の中間くらいに身を潜めて起伏を越える。

レース序盤、集団の走り易さを利用し、なるべく力を使わないように、前を走っている選手のリズムに合わせてながらリラックスして走った。

沿道からは当社や秋田新電元の皆様温かい声援をして頂き、楽しんで走ることが出来た。

レースは平坦なコースがしばらく続いて中盤に差し掛かり、なだらかにコースの道に沿って左に曲がると再び大きな起伏が現れ、登りで集団が少しずつ散らばっていく。

私も多少きつかったが、集団から離れるほどのきつさではなく、登り切ったからの得意な下りでまた呼吸を整えようと意識しながら走っていた。



伴走車待機所付近の先頭集団の様子

その下りで一人の選手がスパートし、更に集団は散らばっていくが、私はその選手の後ろに付いて堅実な走りを心掛け、気付くと先頭集団の人数は数えるほどの人数になり、いよいよ終盤に差し掛かる。

7kmを過ぎたあたりから、東洋大学の選手が再度スパートを掛けたことにより、レースは大きく動き、私自身はその選手の背中をマークして後ろに付いた。

この1kmのラップタイムは前の1kmのラップよりも10秒速く、この時点で先頭はその選手と私のみとなった。



レース終盤に先頭争いをする親崎

9kmを過ぎると各チームの監督、スタッフ及びチーム関係者を乗せた伴走車が、選手の後ろに付く。一般の部の区間賞が獲れそうだったので、ここまで来たら全体でも1位を獲ってやろうと走りながら考えていたが、10kmを過ぎたあたりから、並走している選手が再び渾身のスパートを仕掛け、そこで私はきつくなってきて少しずつ先頭から離されてしまった。

伴走車からは、応援やアドバイスの声がよく聞こえてきて、それを力に変えて最後、出し切ろうと走り、前を走っている選手だっけきっときついただろうと思い、最後まで諦めずに離された距離を何とか保ちながら力を出し切って2区の西沢に襷を渡すことが出来た。

結果、一般の部では区間賞を獲ることが出来たが全体では2位で襷を渡す結果となり、少し悔しさの残るレースとなった。

今年の駅伝を総括すると、スタートからゴールまで一般の部で一度も先頭を譲らずに優勝出来たことは素直に嬉しいが、個人でもチームでも直接的ではないが、大学の部で出場していた東洋大学に敗れたことに関しては悔しさが残る。

自分自身、今回の男鹿駅伝の1区でチームに良い流れを作ることは出来たとは考えているが、個人的な課題として、勝負する中で勝ち切るレースをすることが出来ていない。

今回の男鹿駅伝も区間賞を獲ることは出来たが、全体1位で襷を渡すことが出来ておらず、現状として満足していない。

もっと貪欲に勝ちにこだわり、記録でも順位でもより良いものが獲れるよう、これからも練習を重ねていく。

今後の予定としては、個人では昨年更新した5000m、10000m、ハーフマラソンの自己記録を今年も更新出来るように精進する。

直近では7月に5000mの試合に出場する予定となっているので、引き続き故障には気をつけながら練習を継続し、自己記録を更新する走りをしていく。

チームでは11月に年間で最も注力している東日本実業団駅伝があるので、そこでチームが万全な状態で挑めるように準備する。

昨年の東日本実業団駅伝では故障者が続出し、万全な状態で挑むことが出来ず、悔しい思いをしたことから、今年の東日本実業団駅伝で結果を残すためにまずは夏季強化合宿を故障無く乗り越えて、チーム力向上を目指していく。

また、今しかできない陸上競技に注力しつつ、業務でも競技でも活躍できる一人前の社会人に近付けるよう精進を重ねていく。

最後になりますが、日頃より陸上部へのご支援ご声援を頂きまして、誠に有難う御座います。本駅伝大会では遠路にも関わらず現地まで足を運んで頂いた当社の皆様、地元よりサポートや応援に駆け付けて頂いた秋田新電元の皆様の沿道での温かいご声援が大きな励みとなりましたこと、心より感謝申し上げます。

また、会社のご理解ご協力があり、様々な大会を通じて日頃の応援やサポートがいかに大きなものかを実感しております。

今後も元気に走っている姿をお見せすることで皆様にも元気を与えられるよう精進致しますので、どうか引き続き、変わらぬご支援ご声援を賜りたく、何卒宜しくお願い申し上げます。

(終)

【1区成績】一般の部

距離 : 13.5km

順位 : 1/41位 (大学を含む全体順位: 2/52位)

タイム : 40分52秒 (目標タイム: 新コースのためタイム設定無し、全体1位)

※ 親崎選手のレポートいかがだったでしょうか。

彼の生真面目な性格やひたむきに競技に向き合う姿勢と高い意識の伝わってくる生々しいレポートでしたね。

また、レース中の心境が伝わり、その場で一緒に走っているような錯覚を覚えました。

貪欲に競技を追及し続ける親崎選手とチームの今後益々の活躍をご期待下さい!!

以 上

※ イベントレポート (第2回: 2区) へ続く